

# 藤並の森

Vol.15

高知県立  
文学館



●「土佐昇昇陽（高知市浦戸）」（写真提供／八井田晋）

## リレー随筆⑮ 寺田寅彦のセロのレッスン —— 佐藤 泰平

私のライフワークはこれまで、宮沢賢治の音楽と、日本の古いリードオルガン——その保存・修復・演奏——のための調査と研究、の二つだった。ところが二〇〇〇年十月に高知市の寺田寅彦記念館と高知県立文学館を訪ね、寅彦遺品のリードオルガン、チェロ、ヴァイオリン、蓄音器やSPレコードを調査したのがきっかけとなり、八寺田寅彦の音楽もライフワークに加えられたのである。

十月以後、五カ月かかって、寅彦が残した三十八年間の日記から音楽に関わる記述を抜き出し、ヴァイオリン・チェロ・チェロのレッスンなど十二の項目に分けてA表Vにした。そしてそれぞれ項目ごとに私の拙い解説をつけ、二〇〇一年五月に「研究ノート 寺田寅彦の音楽・日本の古いリードオルガン(6)」として自費出版した。寅彦の一生で音楽がどれほど重要な役割を果たしていたかを知り、また、科学と芸術との間柄関係の特別な親密さを認識できたことは、私にとりこの上ない喜びであった。

さてその後、神田の古書店で「寺田寅彦の追想」中谷宇吉郎、甲文社、昭和二十二年四月）を購入し——うかつにもこの本は未見であった——「先生を囲む話」の「四十 セロの勉強」を一読したとき、これはいつか機会があれば全文引用して多くの方々に読んでいただきたいものだと考えていたのである。（つい先頃、岩波書店の米浜泰英氏から、その文は『中谷宇吉郎集』第一巻（岩波書店、二〇〇〇年十月五日）の一八六頁に掲載されているとご教示いただいた。）

その中谷の文はAこの話は先生のセロの勉強ぶりの話であるVと始まる。A：セロの先生はSさんで、初めの中は確か水曜の晩がセロだったと思う。時々わざわざその晩に出かけて行って、先生の勉強ぶりを拝見するという不心得なことをしたこともあった。その光景というのがまた実に変っていて面白かったからである。V Sさんが来るとしばらく雑談し、寅彦はあまり準備が出来ていないのだがなどと弁解したのち稽古が始まる。Sさんはお世辞など言わない厳格な人。やり直し、やり直して、寅彦の後から「首の曲げ方が悪い」と言って頭を押さえながら弾かせたりもする。まあ今夜はこれくらいにしておこう」と先生が兜を脱がれるまで猛練習が三、四十分続いた。そしてお茶になる。と次は先生と生徒が突然入れかわってしまった。

A「君、ヴァイオリンの弓が長くて、セロの弓が短いのはどういう理由か知っていますか」という風な話になる。Sさんは急に悲しい学生になって「存じません」と言う。「それはね、……」Vと、それから物理学の講義が一くさり始まったというエピソードである。

音楽家が仮に気づいたにせよ、深く追求しない多くの物理的現象を、物理学者はもともとテーマとして取り上げるべきだと寅彦は言いたかったようだ。自分の楽器で実際に音楽を楽しみながら、芸術と科学との接点を見出し、多様な側面からその両分野がお互いに焦点を当て合おうという寅彦の積極的な姿勢が、この一つのエピソードからもうかがい知ることが出来る。

（元立教女学院短期大学教授）

◆次回企画展によせて◆

2002年2月8日(金)～2002年3月31日(日)  
冬季特別展

「パリ憧憬」

「日本文学者の「フランス」体験」



セーヌ川からシテ島を望む

るものと思っていました。2000年に入って、若手の今橋先生が担当される事を知りました。早速、比較文学・比較文化がご専門の先生のご著書「パリ・貧困と街路の詩学」1930年代外国人芸術家たち」や今回の企画展のものになって「異都憧憬」日本人の「パリ」を拜読。サントリー学芸賞や渋沢・クロードル特別賞などを受賞されているこの「異都憧憬」は、先生の博士論文に加筆されたものだそうですが、非常に解りやすく執筆されており、且つ内容も濃く、企画展の観覧同様、若い方にも是非、読んでいただきたい一冊だと思います。

2000年6月、日本近代文学館から「パリ憧憬―日本文学者の「フランス」体験」という企画展が立ち上がりました。監修者は、東京大学大学院助教授で学術博士の今橋映子先生。

その前年に日本近代文学館理事長の中村稔先生から「パリ憧憬―日本文学者のフランス体験と彼らの文学」という企画展を立ち上げるとの紹介があり、企画展の趣旨説明を受けた私は、格調高い文面と企画内容に非常に興味をもちました。その時点では、中村先生が監修され

その中で、私は、高知ゆかりの美術評論家「岩村透」という人物に出会いました。この岩村透との出会いの中から、「日本人(特に土佐人)にとっての異文化体験とは何か」「彼等はその体験から、何を感じ、どのように文学に結実させていったのか。調べてみたい」ということが、今回の企画展開催へのきっかけとなりました。

では、ここで企画展内容を、今橋先生の総解説より抜粋。ご紹介させていただきます。

『1862年、徳川幕府の使節団(竹内保徳遣外使節団)が、日本人として初めて「パリ」の地を踏んで以来、すでに140年近い歳月を経ようとしています。その間、パリという異国の都は、文学・美術・ファッション・料理などの幅広い分野で近代以降の日本人達を魅了し続けてきました。

特に文学においては、自然主義、象徴派、シュールレアリスムから、現代のヌーボー・ロマンや脱構築の思想に至るまで、近代・現代の文学の「潮流」そのものが、フランス文学の最先端の反映であったと言っても過言ではありません。

日本人のパリ体験を考えると、それが亡命、移民労働などではなく、多くが旅行、留学といった、一時滞在の場所であり、パリは日本人にとって、憧れ、旅立ち、そして帰ってくる場所であり続けました。

しかし、明治末から次々渡仏した作家や詩人達は、憧憬の対象が一方で、絶対的に異質な文明としてあらわれるのを見逃しませんでした。永井荷風、高村光太郎、島崎藤村、木下幸太郎、金子光晴などは、各々の異文化体験の光と影を、時代に先駆ける感覚と批判的精神によって、優れた文学作品として遺しています。』

1 先進文明の衝撃と同時代東京

2 憧憬と葛藤―荷風・光太郎



永井荷風 明治40年  
アメリカ外遊中  
高村光太郎 明治44年6月

3 近代詩歌の息



吹一晶子、パ  
ンの会など  
与謝野晶子 大正12年5月

4 旅情からの文明論へ―藤村



島崎藤村『仏蘭西だより』

5 放浪の果てに(1930年代パリ)―光晴・横光など

6 土佐人のパリ―岩村透・中江兆民を展示します。



永井荷風翻案・ソラ「女優ナナ」

同時代の日本との対比、日本人画家・写真家達にとつての「パリ」を並行させ、絵画や写真、翻訳小説や翻訳詩集などの初版本などもあわせ展示する予定です。そして、「土佐人のパリ」のコーナーでは、特に美術評論家岩村透に焦点をあて、ご紹介したいと考えています。



和田栄作(左)と岩村透

岩村透は、1870年(明治3年)東京生まれ。父は岩村高俊。岩村通俊、林有造を伯父にもつ、土佐の権門の出身で、明治39年男爵を襲爵しています。生涯において(パリ万国博、セントルイス万国博など)4回の長期留学体験を持ち、森鷗外の後任として、長年、東京美術学校(現在の東京藝術大学)で西洋美術史を講義、英語の原書講読を担当していました。在職中は、生徒の信頼、人気ともに高かったようで、「岩村先生の授業には、他のクラスの生徒までもが、全員話を聞きに集まった」(谷口午二)「講義で面白かったのは、岩村先生(曾宮一念)と当時の卒業生達は、一様に語っています。彼は、美術学校での講義の傍ら、黒田清輝や和田栄作らと共に、文展や博覧会等の審査員も務めていました。また、大正2年には、「美術」行政上の諮問機関」の必要性を説き、森鷗外を座長とする「国民美

術協会」の結成に力を尽くしています。

岩村透は、48歳という若さでこの世を去りましたが、わが国の西洋美術史の研究と教育の第一人者として、活発な文筆「美術週報」などの美術雑誌の刊行を助け、美術批評、文明批評、美術行政批判にわたるジャーナリズムの発展も促しました。

1966年、岩村透没後50年の供養が神奈川県三崎本瑞寺で行われた際、文芸評論家の野田宇太郎は、追慕の講演をし、その後、執筆した『岩村透50年忌』に「博大円満な近代教養人の美術史家の代表」として透をあげています。また、黒田清輝は「岩村透君を悼む」の中で、岩村透を失ったことは「我美術界の大いなる損失と云うばかりでなく、我々友人にとつては、我々の中の一番高い処の、一番丈夫な必要な木が倒れたのである。(中略)我々の作品を品酷し、指導すると云う友人はこの人ばかりであると云つて宜い、それで我々の森は、此強木を失っ

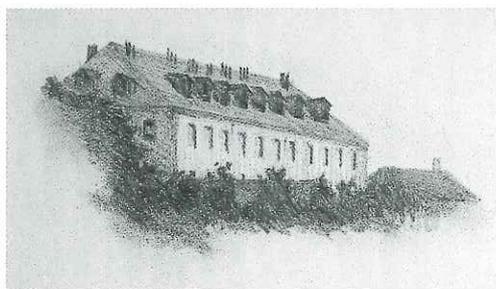
て誠に淋しい木立となった。これから、この美術界を吹き荒らす風が、我々をどう云う風に吹きまわし吹き倒すか、非常に頼りなく心淋しく思ふのである。」とあり、友人として、評論家としての透の存在の大きさを訥々と述べています。

最初は、雲をつかむような状態だった岩村資料の所在が皆様方にご協力いただき徐々に解明され、高知ではじめてご紹介出来ることとなりました。

今回、本展においては、東京大学助教授今橋映子氏監修のもと日本近代文学館明石一郎氏、原裕子氏のご指導をいただきました。

また、岩村透の資料に関しましては、岩村透のご遺族高木陽子氏、海光山本瑞寺住職洞外文隆氏、朝倉彫塑館村山万作氏、東京藝大美術館五味美里氏、史料編纂室吉田千鶴子氏、藝大図書館馬場純子氏他多くの方々に大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

(学芸員 津田加須子)



岩村透「西洋館」鉛筆画スケッチ



「東京美術学校は如何なる改革を要するか」  
「美術週報」原稿

主な展示資料(予定)

○細川家宛 池辺三山書簡

明治25年7月3日付



細川家宛 池辺三山書簡  
(明治25年7月3日パリから)

○与謝野晶子「百首屏風」

○横光利一「旅愁」原稿

○岩村透「鉛筆画スケッチ」

○岩村透「美術週報」掲載生原稿

「東京美術学校は如何なる改革を要するか」

「文展批評を読んで」など

○雑誌「光風」原稿断片「モレリの古画鑑定法」

○黒田清輝宛 岩村透 絵葉書

1905年フイレンツェ

○浅井忠「パリ公園」水彩画

1900年〜02年

○岩村透「野バラ」水彩画

○黒田清輝「裸像(後姿)」油彩画

1889年

○オイデルミン「化粧水」明治30年

など250点

## 学芸員メモ

## 「おあん、婉、お馬…土佐の近世の女性と文学」展を開催して



「おあん、婉、お馬…土佐の近世の女性と文学」展を見学の土佐塾中学校の皆さん  
(2001.12.20)

おあん、野中婉、お馬、土佐の近世に関わる実在の人物である。いずれもこの土佐に生きた女性たちである。あの北山の山並みを眺め、鏡川や江ノ口川の水流れも見、この追手筋あたりを歩きもしたであろう女性たちである。これら土佐女性の大先輩である彼女らの生涯と哀感を振り返ってみたい。

戦国末期の一五八三年頃に中流武士の家に生まれたおあんは、少女時代は戦が多くて、日々つましい切り詰めた暮らしをしていた。一つ帷子(単衣の着物)を成長期の十三歳から十七歳まで着続け、「せめてすねのかくれ程の帷子ひとつほしや」と思ったと率直に語っている。関ヶ原合戦、大垣籠城での血生臭い話は確かに迫力はあるが、今に変わらぬ少女らしい率直な思いにも親近感を持つ。

## 「おあん」の夫は？

さて、「おあん物語」の末尾の解説ではおあんは「雨森義(儀) 右衛門」に嫁いだとあるが、年代的に無理があることは吉野忠氏その他の人々によって早くから指摘されている。儀右衛門氏行の祖父九大夫氏康か、父氏広なら年代的に納得がゆくという。雨森九大夫氏康は、一六三七年の島原の乱に老身ながら出征し、帰途、柏島沖の船中で相果てたという武勇の士である。

もしおあんが雨森九大夫氏康の妻で

あったとするならば、五十歳頃に、今度は愛する夫を戦場に送らねばならなかった。中年期のおあんさんの悲哀を想像する。

## 「おあん」と「婉女」

婉女誕生時は、まさに野中国家絶頂の時であった。そのまま世が推移すれば、土佐藩重臣の娘として幸せな将来が約束されていた幼い童女は、「寛文の改替」で罪人の娘となる。一六六三年(寛文三)の秋風が立つ頃であった。

まだ存命だったかもしれないおあんさんも、さほど遠くない武家屋敷でこの異変を聞いたかも知れない。少なくとも執政野中兼山の人となりとその果敢な仕事ぶりは十分に聞き知っていたであろう。もしかしたらお堀近くを通りかかった折りなどに、幼い婉女が乳母にあやされてるのを見たことがあったかもしれない。知的で賢明な女性であったであろう、おあんさんだが、戦乱に明け暮れた少女時代では手習いする暇も無かったであろう。このおあんさんに筆紙を与えて、存分に見聞した事を書き残して貰いたかったものである。

## 谷泰山と婉女

婉女の話に戻る。谷泰山と婉の心の交流については、昨年十二月九日の記念講演会で、依光貫之氏にご講演もいただいた



「野中婉、その誇り高き半生」をご講演の依光貫之氏  
高知史談会副会長  
(2001.12.9 高知会館)



「おあん物語とその絵巻の魅力」をご講演の桑山俊彦早大教授。  
(2001.12.9 高知会館)

たが、今回の企画展図録に氏は、「婉にとつて泰山は年下ながら学問の師であり、学問の喜びをその人と分かちあうことであった」

「幽囚のなかで文通した頃の泰山は、婉に向って自在に語りかけてくれた。ところが、婉が自由を得たのちに向かいあおうとした彼は、世間のしがらみにしばられ、政治の波に翻弄される存在であった。生きるとは、そうした愛の哀しみに堪えることを意味した」

との名解説をなさっている。

遡れば、一九四二年刊の松澤卓郎氏著「皇学の始祖 谷泰山」において、「二つの魂」として山田(論居中)の泰山が、兼山五十年忌を営む婉のもとに参ずることができない悶々を叙し、

「相思う二つの魂、謫居の垣に隔てられて近づくを得ず僅かに紙上に師弟の交わりをつづけている二人の間に相見えるの機が訪れるであろうか。」と書き結んだ。

また、小説「泰山と婉」(改題「蘭交怨」)を書いた作家田岡典夫も、世間の噂にのぼる事は避けようと努める泰山を、「心や魂は、世の常の交際をせずとも通うのである。」

と二人の胸中に潜めた相寄る互いの心を抑えた筆で描いた。

大原富枝の「婉という女」には、どう描かれたか。これはお読みになられた多くの方のご感想に委ねたい。

ここに泰山が婉女に贈った漢詩と、婉女が泰山の訃報に接し捧げた弔文の一説を掲げておく。

和ニ野中夫人見贈 谷 泰山

揮レ涕観 君筆 名卿種不レ空  
詩源小町妙 経術大家風  
如レ日鏡底底 有レ天鉄閉中  
務応レ存 碩果 明月出 塵蒙

祭泰山谷先生(文抄) 野中 婉

「嗚呼、昔我先生ト岡本氏ノ家ニ邂逅相遇シ、始メテ大学ヲ聴ク、予、交旧ノ情ナシト雖モ予ガ叔兄密ニ萬里ヲ隔テテ師弟ノ親シミアリ。コレニ仍ツテココニ予モマタ骨肉ニ均シク先生ヲ慕フ。然リト雖モ世間ノ姦ヲ恐レテ久シク款文ヲ通ゼザリキ。先生ノ死恨ムベキトナス。庶クバ英霊ソレ来ツテ予ガ非礼ヲ受ケヨ。」

## 「純信お馬」の「恋の形見」

さて、「純信お馬」のお馬さんのこと。今回、お馬さんの資料は、残念ながら写真以外、殆ど集められなかった。だが僧純信が生前愛用した袈裟や、茶碗や自筆の経文などをご紹介できたことはありがたかった。これらの純信遺品は、純信が僧籍を剥奪され国外追放になるとき末弟の正静に「永久に保存を」と託し、一族によって代々守られてきたという品々で、正当な理解が得られないまま罪人として追放された(また、互いに愛する者同士引き裂かれた)純信の無念の思いが籠もる品々である。扱う当事者としても心して扱ひ「純信お馬」の恋をご紹介せねばと思ったことである。

「よさこい節」で土佐のはりまや橋を全国で紹介した「観光土佐」の恩人として「純信お馬」の恋の形見として、これらの遺品は不朽の価値をもつ。

正延哲士氏には「お馬さんへの想い」という玉稿をいただいた。非力な自分ではとても言及できなかった「商家の妻たち」の玉稿をいただいた松本瑛子氏とともに本当にありがたかった。

(別役佳代)

### 横山隆一氏、逝去される

漫画王国土佐の草分け的存在でもあられた横山隆一氏が、昨年十一月八日に逝去されました。四月の「横山隆一記念まんが館」オープンを目前にしてのご逝去は本当に惜しまれてなりません。

一九〇九年(明治四十二)五月十七日、高知市の商家に生まれた氏は、学問好きで西郷隆盛が好きだった母親によって「隆一」と名付けられました。城東中学在学中に父親を亡くし、兄弟とも離れて暮らすことになったりと、そのころから世の辛さを知ることとなります。

城東中学(現・追手前高)卒業と同時に上京。その後、図書館で学んだり、書生生活の合間に投書をしたりと苦勞を重ねながら、彫刻家木山白雲の弟子になります。

す。氏はその後投稿の漫画が次第に認められるようになり、一九三〇年(昭和五)本山家を出ることとなりますが、粘土をこね彫塑の基礎を積まれた経験は、決して無駄にはなりません。

一九九九年(平成十一)の晩秋、当文学館に、元吉勝美氏を通じて横山隆一氏製作の「久米正雄像」が寄贈されました。これは鎌倉時代長く親交された久米氏が死去された夜、久米氏を偲びながら一晩かかって泣きながら横山氏が粘土をこね、ご自分の手だけで作られたという久米氏の頭像です。

久米正雄記念館が福島県郡山市に開設されるに際し、その複製が五つ作られ、まず故郷の高知市と、この高知県立文学館に寄贈されたのでした。その当時連載された高知新聞の「鎌倉通信」にも、こ

のプロンズ像のことが久米正雄氏の思い出とともに綴られています。



久米正雄像に杯を供える在りし日の横山隆一氏 (写真提供/元吉勝美氏)

毎日新聞に一九七一年までロングラン連載され人気を博した漫画「フクちゃん」(漫画集団)を率いての多彩な活躍。「新青年」探偵小説」その他掲載された多くの挿し絵、表紙画。そのほか名随筆の数々、鎌倉文士や文化人との交流など、まさに昭和の文化の体現者でもあられ、一九九四年には漫画界初の文化功労者に選ばれた横山隆一氏。

彫像というには、ささやかな「久米正雄像」ですが、氏の優しさ、不屈の精神が満ちています。今は亡き横山隆一氏の人柄を偲びながら、改めて氏の仕事と生涯をふりかえってみませんか。

(横山隆一氏製作の「久米正雄像」は2Fの「土佐ゆかりの作家」コーナーに常設展示しています。)(別役佳代)

### 閲覧室から

#### 『口語訳』

#### 兆民 一年有半

岡林 清水著



中江兆民が余命一年半と宣告されてから書いた「一年有半」を口語訳したものが、「一年有半」の内容は、百年たったいまなお古びず、現代の私たちにとても当てはまるような言葉がよく出て来て興味深い。話題は、政治、経済、思想、文学、生活習慣などから、死を目前にした自らの思いなどにもおよぶ。

兆民による原文は漢文くずしの文体でやや親しみにくい点もあるが、本著の口語訳は比較的平易で、また、豊富な注釈が付されているので、兆民入門書として読んでみてはいかがだろうか。後半には博文館刊行の「一年有半」(明治34年9月)原文も併せて載せられているので、原文のリズムも味わうことができる。

なお、岡林氏は土佐文学、土佐文学史についての研究者で、特に中江兆民については晩年深く打ち込んでいた。当館では、昨年10月から本年1月にかけて、ミニ企画・岡林清水展を開催し、晩年の書齋の一部を再現したが、その机辺には、中江兆民関係のあらゆる資料、論文、本人による原稿などが山と積まれていた。平成9年5月刊・亜細亜書房。

### 県内同人誌紹介

#### 『土佐史談』



土佐史談会は、高知県の歴史、地理、考古、民俗についての調査研究、発表を行い、県民文化の向上をはかることを目的としています。

会の歴史は大正六年に発足、機関誌「土佐史談」を発行、研究発表会、郷土史講座の開催、史跡めぐり等を重ね八十四年の歴史をもつに至りました。

その間寺石正路・平尾道雄・横川末吉氏など、すぐれた歴史家を輩出し、実証を重んずる気風により、地方史の中で重きをなし、多くの歴史愛好家に親しまれております。

現在会員は約六七〇名、会費は年額五千円。「土佐史談」年三回の無料送付他様々な特典があります。歴史を愛する方々に広く入会して頂くことを願っております。

(佐伯賢一)

発行所 高知市丸ノ内一―一〇

高知県立図書館内土佐史談会

発行人 会長 佐伯 賢一

電話 088-872-6307

幸徳 秋水

秋水絶筆(刑死二日前)

區々成敗しばらく  
論ずるをやめよ  
千古これまさに意気  
存す  
かくの如くにして生  
きかくの如く死す  
罪人またおぼゆ  
布衣の尊さを

区々の成敗しばらく  
論ずるをやめよ  
千古これまさに意気  
存す  
かくの如くにして生  
きかくの如く死す  
罪人またおぼゆ  
布衣の尊さを

秋水復活

木枯の前触れのような風の吹き抜ける午後、幸徳秋水（一八七一〜一九二一・中村市京町二丁目生）の生家跡のある京町二丁目通りを歩いた。両側にかまぼこ屋、酒屋、雑貨店、薬局、銀行等が整然と並んでいる。古色蒼然とした木造家屋の廂に「高知一阪神定期船連絡貨物」の看板が架かっていたりして、幡多北部から高知、阪神方面に向かう人たちの一昔前の往来をしのばせた。秋水の生家は、この通りのほど真ん中に位置し、葉種商、酒造商を手広く営んでいたのである。

生家と見当をつけた辺りで、一軒の理髪店のドアを開け、「秋水の生家をご存知ないですか？」と訊いてみた。折から客の髭を剃っていた初老の店主が、さっと顔をあげ、カミソリ片手にとことこ歩いてきて、「そうです！この真ん前です！」と言いつつ表通りに出た。真ん前の駐車場を指さしながら「この奥までずっと」とと滔々と説明しはじめた。秋水という「有名人」の近隣に住むことのできた人の、なんと誇らしげな顔つき。

昨年十二月、中村市議会は全会一致で、秋水顕彰の議決をした。大逆事件刑死から八十九年の歳月が流れていた。「天皇暗殺を謀議した極悪人」が陽の目を見たのである。しかしそこに至る道程に、森岡邦廣（幸徳秋水を顕彰する会会長・七十五歳）さんを中心に引者とする多くの有志の粘り強い働きかけがあった。定期的に催す講演会、墓前祭、研究誌発行、出版等の活動が実ったのである。

「昭和三十五年、時の森山市長をはじめとする有志が「秋水五十年祭」をやる」と掛け声をあげたのが、復活運動の第一歩。まだまだ逆徒アレルギーは濃厚にあったですね。行商のおばさんに「あの人はやっちゃんぞね」と言われたり」と森岡さんは往

時を振りかえる。耳から耳へ伝わる風評が事実とすり変わる怖さ。「恐ろしい男」のイメージは土の中までしみこみ、世代を超える。無知蒙昧の大衆と一蹴するのはたやすいが、冤罪かどうか、とことん追求するのは、ごく一部の知識人でしかない。それゆえに、議決まで半世紀を要したのである。

秋水の墓参者は、年間三百人という。死後一世紀近く過ぎたというのに、秋水に吸い寄せられる人は途切れることはない。秋水とその悲劇的な死に、今に繋がる問題が見えてこなければ、日本のあちこちから四国果てまでわざわざ来やしないだろう。

国家と個人、天皇制、革命、非戦、富の不等等の是正。人間の存在する限り個々が直面する課題を一身に背負って、今在る我々の代りに死を賭して問いかけた秋水を、汲めども尽きぬ男、と見立ててのことだろう。

墓参者メッセージ欄から抜粋してみる。ハようやく念願が果たせました。これから生誕地を探しに行きます（香川県・高縄洋）ハお父さんやと念願だった秋水さんの墓に参ることができましたね。元気な時にどうして言ってくれなかったの。父の生きる目標だった秋水の墓前にて（甲斐田久夫）V現代っ子女流俳人黛まどかは秋水をハ夏怒涛真つ向うにいていごっそうVと詠んだ。暗かった秋水がやっつと、土佐の海辺の陽光を浴びたのである。

(国則三雄志)

見どころ●幡多郷土資料館●佐田の沈下橋。遊覧船。●トンボ公園●安

並の水車の里●幸徳秋水の墓

交通●JR高知駅より中村、宿毛行き特急、一日九本。

資料受贈報告

(平成十三年八月〜十三年八月)

敬称略

- ▼伊藤丘城・「伊藤丘城作品集」廻
- 伊藤丘城 現代書道研究蒼丘会
- ▼沢田明子・「第四書集」辺土 沢田明子 問の会」ほか▼小松勝喜・「土佐西国観音巡り 小松勝喜 毎日新聞高知支局」▼高知県俳句連盟・「温故知新 高知県俳句連盟編刊」▼大崎二郎・「詩集」きみあーゆうあ 大崎二郎 青帖社」▼林嗣夫・「蘆野通信 林嗣夫 ふたば工房」ほか▼乾常美・「私の土佐日記散策 乾常美著刊」▼市原麟一郎・土佐の神仏出逢い旅 市原麟一郎 リーブル出版」▼上村渉水・「写真句集」土佐遍路 上村渉水俳句・松村一位写真 高知社会文化協会」▼妻鳥季男・「吉井勇先生消息 妻鳥季男編刊」ほか▼村田育代・「随想」静夜抄 問野捷魯 本多企画」▼高知県立歴史民俗資料館・「安芸郡北川村資料調査報告書 高知県立郷土文化会館編刊」ほか▼浜田知章・「岡本彌太関係資料」ほか▼岡本彌太（亀彌太・一八九九〜一九四二）は土佐近代詩確立の中心的詩人で「青き歳の高士」「南海の宮沢賢治」などと評されました。明治三十二年香美郡岸本町（香我美町）に父福太郎、母豊の長男として生まれ城山高等小学校卒業後高知商業学校予科二年に編入学します。ここで知り合った近森豊馬（筆名、夜木虹太郎）から詩の手ほどきを受け詩作に励んでいきます。大正十二（一九二三）年春夜須尋常小学校の代用教員として教職生活に入り同年秋に崑山由と結婚、昭和十一（一九三六）年までに四女をもうけます。大正十二年同志らと詩



幸徳秋水記念碑（中村市為松公園）

文学館日誌 2001年9月～11月

9月  
 ◆1日 栃木県佐野市郷土資料館学芸係長 青村光夫氏ご来館(幸徳秋水研究調査) ◆  
 8日 専門講座「近世土佐の文人たち(北原泰里)」講師竹本義明氏。参加者約40名。/山内一豊入国四百年共同企画 講演会、シンポジウム。県民文化ホール(グリーン)。  
 ◆16日 東広島美術館めぐりの会37名ご来館。◆23日 高知大学 鈴木様、日本玩具博物館 学芸員井上伊都子様、東京家政大学 学芸員綿引はつ子様ご来館。◆29日 (山内一豊入国四百年共同企画)近世大名の誕生展―山内一豊その時代と生涯―11月4日まで。毎週水曜日は午後6時30分まで開館。(土佐山内家宝物資料館主催)文学館ホールにてオープニング式。/山内豊秋様一同ご来館。/朗読の会「八月の午後」被約二岐早提灯「青ずきん」。文学館ホール。午後6時から午後7時30分まで。参加者約40名。◆30日 専門講座「近世土佐の文人たち(日根野鏡水)」講師竹本義明氏。参加者約40名。  
 10月  
 ◆3日 船曳山美様、金沢典子様ご来館。開館時間延長、午後6時30分まで。◆4日 文学館運営協議会。文学館ホール。◆6日 講演「関白と大名」講師三鬼清一郎氏。座談会「海からみた国主交代」講師秋澤繁氏、三鬼清一郎氏。文学館ホール。(土佐山内家宝物資料館主催)◆10日 開館時間延長午前9時～午後6時30分まで。◆11日 おあんさん遺族ご来館(松下葉子様、鷲見牧子、ゆり、歩様)◆13日 カルチャー・サポーター連絡会。午後1時30分～午後3時まで。◆17日 開館時間延長、午後6時30分まで。◆19日 田島征彦夫妻ご来館。◆20日 ミニ企画「岡林清水展」開催(同時開催に、白木郁子氏、谷合左近子氏、中岡眞知子氏による「三水会書展」岡林清水先生を偲んで)2階ロビーにて。平成14年1月6日(日)まで。岡林清水夫人ご来館。/子鹿園来館。生徒6名。引率6名。/学芸員講座「豊をめぐる諸問題」豊臣政権との関係を中心に講師行藤たけし氏。文学館ホール。(土佐山内家宝物資料館主催)◆21日 横山隆二氏、元吉氏ご来館。◆23日 高知北高校来館。生徒6名。引率1名。◆24日 第

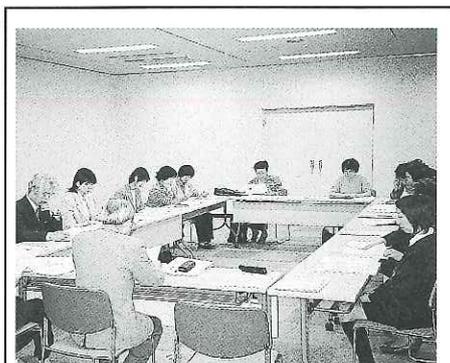


11/11朗読コンクール記念講演会  
 講師・角野栄子氏(中央)

28回俳句展開催。開館時間延長、午後6時30分まで。◆25日 島根県2名ご来館。◆28日 群馬歴史散歩の会ご来館。37名。◆30日 当館名誉館長安岡章太郎文化功労賞受賞。◆31日 四国新聞文化教室ご来館。22名。開館時間延長、午後6時30分まで。  
 11月  
 ◆1日 第28回俳句展終了(最終日正午まで)8日間観覧者計258名。◆4日 「近世大名の誕生展」山内一豊その時代と生涯」終了。第1回紙芝居研究会。午後1時30分～午後3時まで。参加者20名。◆8日 漫画家横山隆一先生死去。◆10日 第4回文学カレッジ(5回開催)第1回目、講師渡辺輝道氏。参加者43名。平成14年3月まで毎月第2土曜日午後1時30分～午後3時まで。◆11日 第4回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査。午後1時～午後4時まで。参加者



10/20～1/6  
 ミニ企画・岡林清水展



カルチャー・サポーター連絡会

◆1日 第28回俳句展終了(最終日正午まで)8日間観覧者計258名。◆4日 「近世大名の誕生展」山内一豊その時代と生涯」終了。第1回紙芝居研究会。午後1時30分～午後3時まで。参加者20名。◆8日 漫画家横山隆一先生死去。◆10日 第4回文学カレッジ(5回開催)第1回目、講師渡辺輝道氏。参加者43名。平成14年3月まで毎月第2土曜日午後1時30分～午後3時まで。◆11日 第4回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査。午後1時～午後4時まで。参加者

閲覧室図書目録完成

文学館カルチャー・サポーターの方々、閲覧室の図書を一冊ずつ確認して目録を作成してくれました。これから、閲覧室での図書の利用や検索が便利になります。カルチャー・サポーターとは、文学館の活動を支援・応援するボランティアとして一般募集し、半年間の研修を受け、今年度4月に認定された方々です。

120名。①金賞 作品名「おみせやさん」大月町立伊田小学校1年 宮地麻理子さん、②郷土文学賞 作品名「お月さんもいろ」須崎市立多ノ郷小学校6年 大崎紗和さん、③特別賞(角野栄子賞) 作品名「クリスマス・カロール」土佐女子中学校3年 生田梨沙さん、銀賞 高知大学教育学部附属小学校5年 上村知奈美さん、伊野町立伊野中学校2年 福島路人さん。記念講演会「ことばは魔法」講師角野栄子氏。◆16日 宮尾登美子先生他2名ご来館。◆17日 朗読の会発足2周年記念企画「寺田寅彦の眼」「高知がえり」「郷土の味覚」「なぜ泣くか」「東上記」「どんぐり」「やもり物語」午後2時～午後4時まで。参加者40名。◆22日 秋季企画展「おあん、婉、お馬」土佐の近世の女性と文学」開催。平成14年1月6日まで。◆23日 大川中学校来館。生徒16名。引率11名、保護者8名。◆24日 里見剛夫妻ご来館。依光貫之氏ご来館。



岡本彌太関係資料

誌「ゴルゴダ」「青樹」などを、十五年には「麗詩仙」、昭和三(一九二八)年「青騎兵」を創刊。六年、岡山県高梁市の間野捷魯の「蟹」に参加。七年十月生前唯一の詩集となる「瀧」を間野の詩原始社から発行し、全国の詩人の注目を集めます。また、八年には吉川則比古編集の「日本詩壇」創刊同人となるなど詩人として精力的な活動を続けます。十四年春には香美郡在所村府内(香北町)尋常小学校訓導兼校長として赴任しますが十五年夏に体調を崩し、十七年十二月高知市内の病院で死去。病名は結核。二十三年七月、出身地岸本の月見山山麓に顕彰の詩碑が建立されました。詩は「白牡丹図」、揮毫は高村光太郎。寄贈いただいた資料は、高知新聞に連載された片岡文雄「昭和の詩人たち(昭和四十三・四・五)」堀内豊「彌太私抄(昭和五十一・四・五)」の新聞スクラップ(コピー)、「岡本弥太論 岡村修」、「岡本弥太詩集 間野捷魯編 聖草詩社刊 一九三三年」など十三点で館の収蔵する彌太関係資料を補強する貴重な資料となっています。このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

# 高知県立文学館カレンダー

2002年

1～3月

	1月—January	2月—February	3月—March
ミニ企画	<p><b>横山青娥展</b> <small>せい が</small> &lt;期間&gt;2002年1月12日(土)～3月31日(日) &lt;場所&gt;文学館常設展示室内                      &lt;料金&gt;350円(企画展中は550円)、高校生以下高知県・高知市長寿者手帳所持者等無料</p> <p>西條八十に師事し、南海の詩人として中央文壇で活躍した安芸市出身の横山青娥。母校安芸中学校(旧)で教鞭をとり、郷土詩壇の発展に尽くした。没後20年のこの年度に、師八十と青娥の書籍を中心に業績を偲びます。</p> <p><b>関連催しもの</b> ※文学館1階ホールにて</p> <p>①平成14年1月19日(土)午後2時～ 文学館朗読の会「ことばを紡ぐ—青娥の作品から—」                      ②平成14年2月23日(土)午後1時30分～(予定) ビデオ上映会「青い山脈」('63日活)</p>		
	<p><b>【第4回文学カレッジ】</b>                      &lt;日時&gt;2001年11月～2002年3月 毎月第2土曜日 13時半～15時                      &lt;場所&gt;文学館1階ホール</p> <p>◆講座内容(敬称略)</p> <p>○第1回(11月10日)…「土佐日記」を読む 講師:渡辺輝道(放送大学高知学習センター所長)                      ○第2回(12月8日)…「一年有半」を中心に 講師:猪野 睦(詩人)                      ○第3回(1月12日)…「野中兼山とお婉—大原富枝のお婉」 講師:山川禎彦(高知文学学校運営委員)                      ○第4回(2月9日)…「高知の詩人たち」 講師:小松弘愛(詩人)                      ○第5回(3月9日)…「科学随筆を探る—寺田寅彦の作品から」 講師:上田 壽(高知医科大学名誉教授)</p> <p>※文学カレッジの受付は終了しました。</p>		
催しもの	<p><b>「パリ憧憬～日本人文学者の〈フランス〉体験」</b> &lt;期間&gt;2002年2月8日(金)～3月31日(日)</p> <p>日本人、特に日本文学研究者にとって異文化体験とは何か、日本文学研究者はフランス(パリ)体験から何を感じ文学にその体験を結実させていったのか、近代日本文学研究者たちの真摯な問いかけを、作品を通して皆様と共に考えてみたいと思います。</p> <p><b>関連催しもの</b> ※すべて文学館1階ホールにて</p> <p>①2002年2月16日(土) 午後2時～午後4時                      「文学館朗読の会」 シャンソンとともに・パリ憧憬～日本人の見たパリ～</p> <p>②2002年3月2日(土) 午後2時～午後3時30分                      特別記念講演会                      演題:「近代美術の先覚者 岩村透—高知・東京・パリ」                      講師:美術史家・前京都成安造形大学長 田辺 徹氏</p> <p>③2002年3月10日(日)(映画会) 午後2時～午後3時30分                      映画会「巴里の屋根の下」(1932年フランス)                      監督・脚本:ルネ・クレール                      出演:アルベール・プレジャン/ポーラ・イルリー/エドモンド・グレベル</p> <p>④2002年3月17日(日) 午後2時～午後3時30分                      特別展記念講演会                      演題:「日本文学者のパリ体験～岩村透を中心に～」                      講師:本展監修者・東京大学大学院助教授(比較文学・比較文化専攻) 今橋映子氏</p> <p>⑤2002年3月23日(土) 午後2時～午後3時30分                      「文学館朗読の会」 パリ憧憬～いごっそうパリをゆく</p>		
企画展示室	<p><b>「パリ憧憬～日本人文学者の〈フランス〉体験」</b> &lt;期間&gt;2002年2月8日(金)～3月31日(日)</p> <p>日本人、特に日本文学研究者にとって異文化体験とは何か、日本文学研究者はフランス(パリ)体験から何を感じ文学にその体験を結実させていったのか、近代日本文学研究者たちの真摯な問いかけを、作品を通して皆様と共に考えてみたいと思います。</p> <p><b>関連催しもの</b> ※すべて文学館1階ホールにて</p> <p>①2002年2月16日(土) 午後2時～午後4時                      「文学館朗読の会」 シャンソンとともに・パリ憧憬～日本人の見たパリ～</p> <p>②2002年3月2日(土) 午後2時～午後3時30分                      特別記念講演会                      演題:「近代美術の先覚者 岩村透—高知・東京・パリ」                      講師:美術史家・前京都成安造形大学長 田辺 徹氏</p> <p>③2002年3月10日(日)(映画会) 午後2時～午後3時30分                      映画会「巴里の屋根の下」(1932年フランス)                      監督・脚本:ルネ・クレール                      出演:アルベール・プレジャン/ポーラ・イルリー/エドモンド・グレベル</p> <p>④2002年3月17日(日) 午後2時～午後3時30分                      特別展記念講演会                      演題:「日本文学者のパリ体験～岩村透を中心に～」                      講師:本展監修者・東京大学大学院助教授(比較文学・比較文化専攻) 今橋映子氏</p> <p>⑤2002年3月23日(土) 午後2時～午後3時30分                      「文学館朗読の会」 パリ憧憬～いごっそうパリをゆく</p>		

【休館日】1月—1, 7, 15, 21, 28日 2月—4, 12, 18, 25日 3月—4, 11, 18, 25日

**次回特別展予告 棟方志功展** 平成14年6月28日(金)～8月4日(日)

「ワダばゴッホになる」(俺はゴッホになる)——そう言って青森から飛び出した青年は、やがて世界的版画家となった。棟方志功の生誕100年を記念し、全国巡回で開催されている展覧会。高知会場では、昭和30年7月に棟方本人が来高し、展覧会が開催されていることから、土佐とのゆかりの資料、作品なども特別出品予定。

**利用案内**

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)  
年未年始(12月26日～1月1日)
- 観覧料 一般350円  
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕  
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
- 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

**交通のご案内**



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立  
**文学館**

高知市丸ノ内1丁目1-20  
 電話 088-822-0231  
 FAX 088-871-7857  
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp  
 http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/  
 〒780-0850